

と思われる。four vessel study の重要性を強調し、本動脈瘤の解剖学的位置関係、手術手技について報告した。

5) 延髄神経膠腫の手術例

高浜 秀俊・佐藤 和彦 (山形大学)
山田 潔忠・中井 昂 (脳神経外科)

延髄に原発した astrocytoma の手術例をビデオで供覧した。

症例は48歳の男性で、1987年3月歩行障害嚔下障害・嘔声を主訴に来院。神経学的には注視方向性眼振・水平性滑動性眼球運動障害・右顔の発汗増加・嚔下障害・右軟口蓋麻痺・右咽頭反射の低下・嘔声・右声帯麻痺・舌の右への偏位・起立性低血圧・右に倒れ易い歩行障害等を認め、延髄の右側に主座を有する髄内腫瘍を疑ったが、CTでは異常は指摘できなかった。MRIのT₂強調画像では、延髄は全体が腫大しHigh intensityを呈していたが、Gd-DTPAにより造強されなかった。椎骨動脈写では、両側の後下小脳動脈の外側への圧排所見を認めるのみで、tumor stainは認められなかった。1987年4月生検を行った。病理組織学的診断はpilocytic astrocytomaであった。手術後、局所に30Gyの照射を行い、外来で経過観察していたところ、1988年9月頃より歩行障害が、11月より嚔下障害が徐々に進行し、1989年1月になるとしばしば転倒するようになり3月再入院となる。

延髄背面の腫瘍の一部は、単純CTでLow densityを呈し、造影CTでenhanceされた。MRIでも、同部位はT₁強調画像でLow intensity, T₂強調画像で、High intensityを呈し、Gd-DTPAにより造強された。血管写の所見は前回と変わらなかった。

術中モニターとして呼吸を用いたかったがbuckingがこわく、筋弛緩剤を使用し全麻下に、corticospinal D-responseをモニターして行った。腫瘍のおよそ70%を摘出した。術直後より自発呼吸はみられたが換気は十分でなく、術後8週間程assistを要した。術後管理を含めて報告した。

第14回リバーカンファレンス総会

日 時 平成元年12月2日(土)

午後1時30分

会 場 日本歯科大学新潟歯学部 講堂

一 般 演 題

1) 本院職員に対する B 型肝炎ワクチン接種状況と効果の検討

川村 正・小池 雅彦
広瀬 慎一・遠藤 次彦 (長岡赤十字病院)
荒井 奥弘 (消化器内科)

1987年1月から本年10月まで本院職員および看護学生630人(女521,男109)に対して接種したHBワクチンの効果について検討した。HBs抗体陽性率は、女86.0%,男67.0%全体で82.7%であった。各年代層とも女が男より15~25%効率であった。陽転者の1,2年後の抗体価の推移は、1年で22%,2年で43.3%が低下し、陰性化は1年で5.4%,2年で17.0%に認めた。ワクチン接種後なおHBs抗体陰性者並びに低抗体価陽性者67人に4回目の接種をした結果、陰性者の45.7%が陽性化し、低抗体価陽性者の95.2%が10倍(RIA,COI)以上に上昇した。630人,1960回のワクチン接種を通じて大きな副作用はなかったが、6人(0.95%)に軽度のトランスアミナーゼ上昇が一過性に出現した。

2) 当院における HB ワクチン投与と自然抗体陽性化についての検討

吉田 俊明・鈴木 健司
村山 久夫 (信楽園病院内科)

【目的】当院における自然HBs抗体陽性化とHBワクチン接種後の反応性について、年6回の職員定期検査成績をもとに解析した。【方法】血漿由来HBワクチンを各20 μ gを3回接種し、血中HBs抗体価を測定した。当院就職時HBs抗原陰性、HBs抗体陰性の職員を対象に自然HBs抗体獲得までの期間を観察した。観察期間は就職時から①HBs抗体獲得時、②HBs抗体陰性最終確認時、または③HBワクチン接種時までとした。①を自然陽転例、②③を陰性例として検定した。【結果】HBs抗体自然陽転例は276例中57例(21%)であり、その多くは一過性陽性を示した。看護婦(士)の累積50%陽性期間は8.2年であった。ワクチンの初回接種を253例に施行した。抗体獲得率は85%であり、その抗体価には著しい個体差を認めた。